

# ◆連載

# いま留萌むかし 第四十一話

## ●工業のはじまり

留萌の本格的な工業の始まりと言えば、明治三十七年六月に開業した佐藤隆工場である。この工場は最初、小規模な鉄工場から始まり、のち、事業を拡張して留萌最大の工場として操業した。

この工場主佐藤隆は明治四年十一月岡山県児島郡に生まれた。まだ開拓の畝の入ってまもない北海道に渡り、旧加賀藩士斎藤知一に随って羽幌で捕鯨業に従事し、斎藤が留萌の大和田の斎藤炭山を経営するや、その経営に参画し、明治四十三年の「天鹽国要覽」によれば斎藤炭山合名会社業務執行社員となっている。これと同時に彼は明治三十七年に留萌で精米業を営み、明治四十一年に事業を変更、鉄工場を経営し、次第に事業を拡張し、明治四十三年には木工部を設立した。当時としては近代的な工場として特記

されるものであった。

その施設及び営業内容を明治四十四年の北海道植民公報から拾ってみよう。

計	倉庫	工場	木工部	金剛砂盤	旋風機	螺切盤	ボール盤	平面盤	旋盤	設置機械	原動機	計	倉庫	賭場	製罐部	鑄鉄部	火造部	仕上げ旋盤部	木造証書平屋造り	鉄工部
八十五坪	十五坪	七十坪	七十坪	二台	二台	一台	三台	一台	八台	二百四十二坪	七馬力一台	六坪	六坪	三十二坪	七十坪	四十二坪	七十二坪	七十二坪	七十二坪	七十二坪

設置機械  
原動機関 二台  
汽機 三台  
大丸鋸、中丸鋸、小丸鋸、豎鋸、横切鋸 各一台  
金剛砂濾  
自家用発電機 一台

鉄工部では炭鋳用巻揚器械、同各種機械、漁業用沖揚器械、精米機械、石油発動機、船舶器械等を製造販売していた。その売上は鉄工部年間約二万円、木工部約一万五千元に達している。製品の販路は鯨漁場を第一とし、樺太、天塩沿岸、空知、文珠、大和田各炭山、上川空知の精米所・鉄工所などであった。木工部の製品の内、建築材は主にこの沿岸に供給し、箱材は樺太方面及び天塩沿岸に、下駄棒は東京北陸方面に供給された。この成功によって彼は明治四十四年小樽の稲穂町に本工場と同規模の分工場を設立し、

大正元年には若内にも小樽分工場の出張所を設け事業を拡張している。留萌の本工場は大正七年頃まで続いていたが、後転居したという。これは彼が事業の師として仰いでいた斎藤知一

の斎藤炭山が大正五年に休山したことも関係があるのかもしれない。明治三十七年から大正七年まで僅か十五年間の操業であったが留萌の実業界にとっでは大きな刺激であった。



佐藤工場全景